

翻訳

保育における労働者としての男性欧州連合保育ネットワーク討議資料より

小 崎 恭 弘

**European Commission Network on Childcare and Other
Measures to Reconcile Employment and Family
Responsibilities Men as Workers in Childcare Services :
A Discussion Paper by Jytte Juul Jensen**

本稿は1996年に欧州連合保育ネットワークから討議用の資料として出された「Men as Workers in Childcare Services」(「保育における労働者としての男性」)の翻訳である。この討議資料の報告者である木下⁽⁶⁾によるとこれは、EC(欧州連合)の男性の保育参加に関するワーキンググループのメンバーである、Jytte Juul Jensenによりまとめられ、1995年に発刊されたものである。この資料の内容は、基本的にはJytte Juul Jensen個人、及び男性保育者の増加を進めようとする北欧諸国からの視点で書かれている。

しかし同時にその視点は現在の日本の状況に類似している点も多くあり、今後日本における男性保育者の研究を進める上においても、意義深いものであると考える。

目次

序章

- I. 序論：男女同権の保育所
(以上本号)
- II. 男性保育者は必要か、否か
 1. 子どものために
 2. スタッフ間協力のために
 3. 親のために
 4. 男性のために
 5. 労働市場のために
- III. 政策
 1. 序論
 2. 責任を持つ機関
 - A. 政策の目的
 - B. 行動計画
 - C. 新しい行動計画の継続的評価、改正、組織化

3. それぞれの保育施設
4. 研修機関
5. 諸問題
 - A. 助言とサポート、男性のネットワーク
 - B. 給料、雇用条件と雇用状況
 - C. 研究と知識

IV. 結論

序 章

欧州委員会とその組織メンバーとなっている国々は、男性の保育者の役割を支持し、奨励するため、男性保育士の役割と必要性について明確な政策声明を発表した。

- ・社会政策に関する政策書で委員会は、家族や雇用の責任を性別で分けることは、女性の生活を抑制するだけでなく、男性から、育児や子どもの成長によって得られる感情面での成長を奪うと認めた。
- ・社会政策に関する白書で委員会は、男性が育児の役割においてより大きい責任を負うためには、男性と女性の間により大きい結束が必要となることや、社会における固定化された性別の役割の問題に取り組む方法を積極的に考察することを論じた。
- ・1992年3月に採択された保育に関する委員会の推薦で会員となっている国々は「個人の自由という問題はあるにしろ、男性の（育児や子育てへの）より多くの参加を促進し、奨励すること」を明文化した。（第6条）

数年の間、保育に関する欧州ネットワークは、男女の雇用と家庭の責任の差をなくすために、養育者としての男性の役割、特に育児や子育てへの男性の参加を増やすことを促進し奨励ために、様々な手段や方法を探究することによって、先にあ

げた第6条の実行を優先することとした。

ネットワークの研究計画には、加盟国での父親と母親の雇用分析、父親が利用できる様々な休暇で実際に使われたものを含めて、子どもがいる労働者の休暇計画の調査、性別間の役割の変化をサポートするためにいくつかの国ではすでに取られている対策に焦点をあてる国際的なセミナー、父親や父性、育児者としての男性に関する新聞記事のどのような内容であるかをチェックする調査、そして性別の役割の変化をサポートするための父親の保育所への参加や使用についての計画がある。

この研究のほとんどは父親に焦点があたっているが、これだけが男性ができる育児に関する役割ではない。別の大事な育児に関する役割は、保育に携わることである。しかし父親という役割に比べると、この保育に携わる人は現在非常に少ない。保育の仕事（また年少者のための他の仕事）は全労働力の中で最も男性という性別のみで、判断させ男性が遠ざけられる仕事のひとつである。我々のこの分野における知識と経験は全く研究されていない。我々は保育の仕事に携わる男性の有利な面と不利な面についてほとんど知らないし、より多くの男性が保育の仕事に携わることの障害やその男性の数を増やすための効果的な戦略についてもほとんどわかっていない。

この報告書が保育ネットワークのために作られたのは、こういった状況からである。本報告書は保育ネットワークのデンマークの会員であるJytte Juul Jensenが書いたものである。Jytte Juul Jens-

enは保育ネットワークの‘保育者としての男性の労働組合’のメンバーで、この組合にはベルギー、イタリア、イギリスの会員も含まれている。Jytteはこの報告を書くのにことに適したポジションである。なぜなら北欧の国々は他の加盟国より保育の仕事に携わる男性の問題（より広義の意味での男性保育者の問題）に注目しており、この議題に役立つ多くの調査を行った。Jytteはまた北欧大臣評議会の平等権利プログラムのもとに設立された公共保育業務に男性を雇用させる事業の顧問グループのデンマーク人会員であった。北欧型の保育における一つのアプローチは、年少者のために働く男性の数を増やすことが重要だと考えている。男性職員と女性職員の両方が子どもたちには必要だと考えられている。男性は女性と同じ基準の労働者と認められている一方、男性と女性では違った働き方をするかもしれないと考えられている。ここでの議論はどのように数を増やすかということである。

しかしイギリスでは、議論はもっと別の視点であり、保育やその他の業務における子どもの虐待の危険性や男性を雇うことがその危険性を増やすかという事に焦点が当てられている。著者の中には、これらの理由で男性を雇うべきではないと提案する人さえいた。それゆえイギリスの議論のあり方は、なぜ男性が保育の仕事につくべきなのか、またもし男性が保育の仕事につけばどうなのかということである。

このような様々な状況のもとで保育ネットワークは、報告書は議論を助長するための議論書として作られるべきだということを取り決めた。またJytteはそれを彼女の個人的かつ北欧的見地から書くように要請を受けた。このように男性を雇うことに対する議論は、男性職員への不安は認められた一方、報告書はもっと男性が雇われるべきだという明確な態度をとっている。これは、ネット

ワークも同様に取り持っている態度で、目標として20パーセントの男性職員が次の10年の間に働いていくべきだと提案するにいたった。しかし議論書の枠組みは、男性が保育に携わることに反対している人や、他の見方を持つ人からの広範の異論や反対議論を認めるものである。

それゆえ議論書は次の3点に関することについて述べている。

1. 「保育の仕事に携わる男性の数を増やすことがなぜ重要なのか。」
2. 「これを達成するためにはどのような状況が必要か。」
3. 「どうすればこういった状況を作れるのか？」ということである。

議論書には大きく2つの視点がある。最初は、保育の仕事に携わる男性の数を増やす理由を検討している。それには、子ども、職員、親、男性自身、機会均等の権利を含む労働市場の点から問題を検討している。その中では、男性職員を増やすことに対して、保育を行う上で男性は十分な能力や興味を欠くといったことや、男性が女性から職業を奪う、そして性的虐待が増えるといった議論についても検討を加えている。

もう一つの視点は、どのような政策が保育に携わる男性の数を増やすことを推進し、サポートするのかを検討している。この中には、国、地方機関、私立団体、養成機関、労働組合、すでに保育業務に携わる職員、親、そしてなんといても子どもたち自身を含むすべての保育関係者のなかで、誰が議論の基礎を築くことができるのかという根本的な問題を投げかけている。議論やできれば政策の発展への他の刺激になるものとして、議論書は様々な国、多くは北欧の国々そしてイギリスで取られている先進的な事例提示している。

この議論書は、「同人数の男性と女性を雇っているゴーテンブルグにある‘機会均等’の保育所

の実例が示されている。このことは以下に続く様々な議論に何かしらの情報を与えるものである」

序章担当 ピーターモス（彼は、欧州委員会ネットワークにおいて保育や、女性と男性の雇用と家族における責任の差をなくすための他の対策に関する責任者である）

I 序論 男女同権の保育所

1988年にスウェーデンのゴテンブルグの男女同権委員会が、同数の男女が働く保育所を開くことを決め、それは職員、子ども、そして親に‘平等’と考えられる職場を作り出すことにあった。ある調査員がその事業を評価するのに任命された。以下その調査員（Granath Sundqvist 1992）の報告に関して私が行った要約である。

我々の保育所の特徴が述べられるとき、人々の興味はたいていの場合、男性にあてられる。女性も同様に重要なのである。実際的な効果が現れるのは、女性スタッフと男性スタッフの間の相互作用によってである。（保育所の女性リーダー）⁽⁴⁾

この事業の目的は、保育の仕事に携わる男性の数を増やし、子ども達に男性と女性の両方が保育に関わっている環境を与えることである。市町村の保育でどんな職員モデルを子ども達に示すかということについて、よく話し合われる。この問題は、従業員の責任についての問題だけではなく、親の関心や社会責任についての問題でもある。社会の他の多くの職場でも、女性と男性が男女混合の集団の中で一緒に働かなければならない労働組織がある。

この調査事業は、最初に労働組織をとりあげている。労働市場における役割区分と仕事上の年功における性別効果についての社会的慣習の理解を得るために社会学的な調査事業を行う。

この調査の大半は、男性が優位を占める職場に女性が入ったときどうなるかを調査している。そして、スウェーデンの調査結果は次のようになっている。女性は男性に従属する。男性は、仕事が女性優位なものになると立ち去る。そして女性は、職場にい続けるための様々な努力を行う。また反対に女性が優位を占める職場に、男性が入ればどうなるのだろうか。男性と女性は、自分達それぞれお互いについて何を言うのだろうか。この調査事業に使われた方法は、男性の保育者11人と女性の保育者25人にインタビューするというもので、彼らにはこの男女同権の保育所と、男性がいる保育所やいない保育所の保育者が含まれる。子どもの観察は行われていない。

この保育所が、同数の女性と男性を雇って、男女同権の職場であるという理解をして1年間機能した後、結論は、そこに働く女性と男性が、保育所に男性と女性が働いているという事実に対して確実な‘賛成’をしたということだった。親や子どもや、そして雇い主からも賛成された。

男性がいることにより、政治のような話題で以前とは違う広がりをもった会話が行われるようになったという点で、スタッフのチームワークに影響を与える。しかし女性は依然男性が加わることなく女性の話題を話す。またコミュニケーションの仕方が変わった。男性は女性より率直で、これは女性に評価されている。問題が早く解決されるようになった。物事を遠まわしにしたり、いろいろな人に相談したり、物事を直接的に言うのを控え、それゆえに衝突を起こすという女性の典型的な話し方はなくなった。

男性も女性も、同数の男女スタッフが働く保育所にはたいてい衝突がないと感じている。女性は自分自身が従属していると感じることなく、男性の話し方を取り入れている。女性は、その様な職場の環境がとてもよいものであると実感している。

報告では次のように述べている。

それを従属と考えることは、どれほど建設的なことなのだろうか。女性がより良いものとして考えるものではないのか。これは、男女同権の支援者が何年間も男性の上司から不必要に求めてきたもの、つまり女性独特の価値観を評価するものではない。

この保育所では、仕事に対するアイデンティティを持った強い女性があり、この変化は全く新しいものと見なされなければならない。男性は女性とは違った考えを持っているかもしれないが、女性は何をしたいのか、それをどうやってやるのか、どうやって維持するのかを理解している。

男性の保育の仕事での受け入れられ方も注目される。それは、男性が多数を占める職場での女性の受け入れられ方とは全く違うのである。全員が、男性の保育者に対して肯定的なのである。例えば、女性保育者は大変肯定的で、男性と一緒に働くためにこの保育所に応募した人もいるのだ。そのうちの誰もが、同一の性別の人しかいない職場には戻りたがらない。男性の職場に入る女性の調査は反対の結果を示した。多くの男性が去り、自分たちが納得できない職場は低く評価される。

自治体の職員も、男性保育者に対してとても肯定的で、彼らを支持している。例えば、彼らは新しい、より刺激的な仕事を提供されたのである。男性が何か肯定的なものをもたらしたということに関して疑問は一度も出てこなかった。少なくともしばらくすれば、全ての親が肯定的になる。最初2人の母親が否定的であった。彼女らは、自分の子どもの世話をするのに、男性が十分な能力を持っているのか心配していた。この2人が、小さい女の子のいるシングルマザーであった。彼女らの心配は、すぐに完全に消えたのだ。

男性職員とのインタビューの中で、彼らが保育者という仕事を選んだことについて、周りの他の人々からや、彼ら自身の親から抵抗されたという事を述べた人はいなかった。しかし次のような否定的な意見をされた人もいた。またそれ以外にも多くの以下のような意見をまわりの人々にされた。

いつになったらちゃんとした仕事につくんだ。
お前がベビーシッターになるような子に育つとは思ってもしなかったよ。(母親)

ずっとお前を立派な人間にしようと努力してきたのだが。(父親)

友人からの意見は、賛否両論だった。

女性の仕事だろ。ゲイがいっぱい働いているに違いない。

実際にはどんなことをするんだ。

おむつを替えなければならないのか。

男性と女性が保育所で一緒に働くのはいいことだ。

全ての男性は、保育者としての訓練を受ける前に、子どものいる職場で働いたことがあった。彼ら全てが、その仕事が好きであるが、それはストレスがたまり、賃金がかなり少ない仕事である。肯定的な面は、自由に自分の意思決定ができることや子どものために働くことが重要であると思えることである。男女の違いについて言えば、男女同権の保育所で働く男性は、体を使って運動的・体力的な活動が増えて欲しいと思っている。また、彼らの多くは年長の子どものために働き、木工作業や歌のように計画に沿って行われる活動をしたいたいと思っている。少人数の男性しかいない、また一人だけしか男性保育者がいない保育所で働く男性は、より多くの男性が働いて欲しいと思っている

る。従業員間のよい関係は、主に男女同権の保育所の男性がより高く意識している。彼らは職場で他の男性と話すことができることを高く評価している。保育所で唯一の男性職員として働く人は、他の男性職員が女性の職員から言われたい意見を聞かされる。

そんなに騒がないで。
ボールを蹴れるよね。それは男の子がすることだよ。
私が両親と話したほうがいいわね。

女性が自分達に対して過保護であったという男性もいる。例えば、男性が海水浴を任されているのに関わらず、女性が水着を片付けたり、男性の仕事であるのに女性が後片付けをしたりするといったことである。

男性は他の男性保育者に対しても肯定的であるが、中には否定的な意見もある。

保育者の研修を始めるまでは、私だけが教育的で公正な視野を持ち、この職業を選んだ人間だと思っていた。他の男性は、座って編物やそのようなことをする女性的な人だろうと思っていた。しかし、中には違う人もいるが、大多数が私のような人であった。

保育所における男女間の違いに関する質問が、最初男性に向けられた。それに対する答えは、男女とも同じように研修を受け同じ事をするので、違いはないということであったがインタビューの間に多くの違いが出てきた。

男性は、子どもと違う方法で遊び、女性より格闘ごっこをよくやり、率直である。

男性は女性より厳しく、子どもをからかい、たくましくしようとしていると見られている。

我々男性は、行動に対して女性よりも不当に判断される。女性のほうが、整頓が上手だと思われる。

少なくとも指導者に関する限りは、女性はストレスをためずに一度に男性より多くのことをできるように思える。

ほとんどの男性は、例えば音楽や木工作業やスポーツに得意であるというような何か特技を持っている。女性には平均的な人が多い。

子どもに関する男性保育者の意見は、示唆に富み感動的で、時々少し驚かされるものである。子どもの中には、他の男性と親密な関係がない子がいて、彼らにとって意義のある存在であると感じる男性保育者もいた。中には、保育所に男性がいることをなかなか理解できず、男性職員がいることに安心するのにいくらか時間がかかるような子どももいる。このことは何よりもまず、年少の子どもにあてはまり、ほとんどの場合、身近に父親がいない子どもにあてはまる。

私が以前働いていたある保育所には、シングルマザーを持つ子どもがたくさんいた。その多くが、私のことをお父さんと呼んでいいか尋ねてきたが、私は間違っていると思った。後で私はその子どもが、保育所の外の友達には、お父さんは保育所で働いていると言っている聞いた。

ある小さい子どもが私のことをお父さんと呼んでいいか尋ねて来た時、その子に、ここに自分の父親はいない。そして別の父親を持つという事についてじっくり話した。その夜、その子のことを考え直して、自分が心が狭くて弱かったと思った。保育所や幼稚園のお母さんがいたのだから、そんなお父さんがいてもよかったのではないか。しかしそれは、非常に責任の大きいことだ。

この報告では、男性としての父親が子どもの生活の中で重要な役割をはたしていることを示した調査が強調されている。男性自身の存在は、子どもにも男性像を持たせ子どもの生活の中における男性像の構築に自然な助けとなる。男性は、子どもが男らしさとは何かという考えを持つのを手助けできるのである。

女性保育者とのインタビューでは、賃金の低さが強調された。子どもと接する時間が少なすぎることをよくないと言う女性も多くいた。男性保育者でこういう意見を持つ人は少ない。男性保育者と働くこういった女性保育者は、すぐにそしてためらうことなく男女間の違いを言うようである。彼女達は、男性保育者と働くことについて、多くの場合肯定的な意見を持っている。スタッフ間協力について言う人もいる。子どもに関して、女性スタッフは次のように述べている。

男性保育者は良い男性像である。

父親がいない全ての子どもにとっていいことだし、他にもいいことがたくさんある。

保育所で男性と女性の両方がいることは子どもにとっていいことだ。

男性保育者がいることによって、子どもは特別な何かを得られる。我々女性保育者が子どもをひざの上で抱いてやり、色々なことを説明する。一方、男性保育者はより指導的に子どもと接する。

男性保育者は女性保育者よりも子どもに厳しく我々は優しい。

男性保育士は格闘ごっこやボールを使った遊びなど荒っぽい遊びをする。

保護者との協力に関しては、父親は女性保育者しかいない保育所でよりも、男性保育者がいる保育所のほうでより多くの時間を過ごしている。また男性保育者の方が、保護者にはっきりと物と言うといわれていた。最も否定的な意見は、男性保育者はしばしば仕事を辞めるということであった。また、男性保育者は特別扱いされていると言う女性保育者もいた。男性保育者は仕事の能力よりも、実際にいるということだけで、過剰に評価されているというのである。女性保育者はこれを不公平だと感じる。しかし、彼女らが言うように、それは男性の責任ではない。他の否定的な面は、男性保育者は掃除や後片付けなどの仕事を忘れ、子どもといる時にはそれをしないということである。男性保育者は計画や、子どもと接することに時間を費やすのだ。女性保育者もそういったことをするが、掃除や後片付けなどの仕事もしなければならぬ。しかし、女性保育者が、男性保育者が全員同じではないと言っていることも注意しておかなければならない。

最後に、男性保育者と働いたことがない、もしくは限られた範囲でしか男性と働いたことがないという女性保育者の多くは、男性保育者が職場にいることを嫌なことだとは思っていなかった。

しかし中には完全に反対する人もいた。その理由は、何よりもまず男性が子どもを理解せず、子どもが発する信号を感じ取らず、子どもと遊び続けることしかしないし、そして男性は掃除や後片付けなどの仕事を故意に避けるという意見である。男性保育者と働いたことが少ししか、また全くないこれらの女性保育者は、男性保育者がどのように子ども、スタッフ間の関係、保護者との連絡において独自の役割を果たせるのか、そのことについて正確に述べるのがなかなかできない。

インタビューで、男性自身が10年や20年の間に保育者になれることは信じがたいことだと思って

いたことが分かった。女性もそう思っていたのだ。
この報告は次のように結論付けている。

もし政治家や官僚が、将来、保育所を男性も女性も働く職場となって欲しいと思うなら、男性が女性の仕事を選んだとしても、女性とは違うということを理解しなければならない。男性は賃金や、学習を続けられるといった更なる可能性を要求する。男性は、女性の特徴であった従属、我慢強さ、誠実さをみせない。これらは職業の違いというよりも性別の特徴なのである。

注(1)

本文中に出てくる (childcare) center は「保育所」、nursery (school) は「託児所」kindergarten は「幼稚園」と訳した。

注(2)

「“childcare services” (保育と訳した) という用語はこの報告書では、義務教育前の子どもに世話や教育を提供し、就学している子どもに世話やレクリエーションを供給する業務を意味する」とある。

注(3)

pedagogue は「保育者」、worker は「職員」、stuff は「スタッフ」と訳した。Pedagogu 「保育者」と worker 「職員」の間に意味の違いはなく、どちらも「保育者」のことである。しかし「スタッフ」に関しては、意味の違いが言及されておらず、もっと広い意味での「職員」を意味している可能性があるので「スタッフ」とそのまま訳した。

注(4)

本文中に「斜線の明朝体」の表記がある。これは原本に近い形でのものであり、原本の中においても、インタビューや一般的な意見として、表記されているものにできる限り忠実な形で再現してい

るものである。

注(5)

木下比呂美 「欧州委員会保育ネットワーク『保育者としての男性』の提起するもの」保育情報No. 236 1996 保育研究所 p.6

注(6)

本翻訳においては「Jytte Juul Jensen」から承諾を得ている。

Japanese translation right arranged with the author by Union Press, Union Services Co., Ltd.

・付記 翻訳に際しては佛教大学の森田大介氏にご協力をいただいた。感謝申し上げます。

【参考文献】

- ・木下比呂美 「なぜ、男性保育者は必要か？」 保育情報No.260 1998 保育研究所
- ・埋橋玲子 「男性保育者導入の目的」 保育の研究No.19 2002 保育研究所
- ・中田奈月 「男性保育者の創出」 保育学研究 第40巻 2002 日本保育学会
- ・小崎恭弘 「男性保育者物語」 2005 ミネルヴァ書房